

この内容の一部は1月28日のNHK「ダーウィンが来た」で放送予定です。

ペルーアンデスにおけるプヤ・ライモンディの調査
**Research of *Puya raimondii*
in Peruvian Andes**

2005・2006

岐阜大学・応用生物科学部・生産環境科学課程・川窪伸光



ペルーアンデス, 標高3000mの街 ワラス。 遠く白峰ワスカランを望む



ワラス市街のお祭りの朝。郊外からインディオの女性達が花を売りに来る。





リマからワラスへの峠は4000mを越える。そこには小さな集落があり、小さなローカル・レストランがある。調査一年目にそのレストランをやっている彼女の孫の写真を撮った。2年目にその写真を焼いて持ち帰り、お渡しした。顔をくしゃくしゃにして喜んでくれた。




調査地へは、毎朝山道を2時間かけて通う。ここは最高の通勤路だ。



通勤路の路傍の山は絶景だ。



調査地の背景はこの景色。黒い小さな点がウシである。



調査地に到着して、車から荷物をおろす。標高4250m。酸欠で、どんな荷物も重く感じる。



調査地にむらがるプヤ・ライモンディの未成熟株。何十年後？に開花する。



調査地のパノラマ写真。電柱のように立っているのが、プヤの開花株。



電柱のように立っているのが、プヤの数年前の開花株。黒く枯れている



プヤ・ライモンディの開花株。
夢にまで見た姿だ。

20年以上前に、大学院生で
あった僕は、枯れた株に出
会って、再会を誓った植物だ。

高さ約12m。これがパイナッ
プル科の草で、100年かかっ
て生長し、1回だけ開花して
枯れる植物だという。

だが、その真の生態は謎であ
る。そこで、僕たちはこの植物
を解剖し、あらゆる側面から
生態を探ることにしたのだ。

標高4300mの高地である。
酸素が不足する環境で調査
は簡単ではなかった。





如何なるものも拒む葉である。



共同研究者の静岡大学の増澤教授が長年にわたって研究を続け、その成果によってペルー政府からプヤ解剖の許可を得た。インディオの人々が快く協力してくれる。





丁寧に、丁寧に、プヤの解剖は進められる。愛でるように観察する増澤教授



美しいプヤの葉序









開花直前株





プヤの解剖は、徹底的に観察し、見落としが無いように慎重に進めていく。



解剖調査中は、
雄大な景色も目
に入らない。無
我夢中といえる







プヤの解剖は、各所に数字を書き込みながら、計測・測定して慎重に進めていく。

プヤの開花株を倒そうとしている。心臓は、準備段階から高鳴る。



岐阜大学 応用生物科学部



とうとう倒した。感無量だ。





興奮で手が震えるが、迅速に解剖をすすめ、各所の計測をひたすら続ける。





横たわるプヤ。上は外観。下は断面。なめるようにして、あらゆる計測を進める。プヤの死を無駄にはしない。絶滅危惧種であるプヤの謎の生態を解明して、自然保護区全体のプヤ達を将来にわたって保護するのだ。



岐阜大学 応用生物科学部





解剖・計測を進めながら、みんなで議論を交わす。南米でもっとも歴史ある大学サン・マルコス大学の研究者も議論に加わる。

実は、僕は高山病でへろへろだった。酸素マスクで頭痛を抑えながら作業だった。近年にないきついフィールドワークだったと思う。











